

2008年2月29日

ベネディクト16世及びローマ教皇庁関係者列席の下で行われた四旬節説教

説教者：Raniero Cantalamessa（カプチン・フランシスコ修道会）

原資料：<http://www.cantalamessa.org/en/predicheView.php?id=238>

翻訳者：山内智恵子（鷺沼教会）植田眞弘（大船教会）

## 1. 宣教なさるイエズスから宣べ伝えられるキリストへ

「コリントの信徒への第二の手紙」は何よりも教導職に宛てられた手紙ですが、その中で聖パウロは次のような行動規範を記しています。「わたしたちは、自分自身を宣べ伝えるのではなく、主であるイエス・キリストを宣べ伝えています（2コリント4章5節）」。同じ信徒たちに宛てたその前の手紙では、こう書いています。「わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています（1コリント1章23節）」。使徒パウロがキリスト宣教の内容を一語で把握しようとするとき、その一語は必ずイエス・キリストその人なのです！

これらの表現の中では、福音書とは異なり、イエズスはもはや宣教なさる方としてではなく、宣べ伝えられる対象と見なされています。同様に、「イエズスの福音」が古い意味を失うことなく新しい意味を獲得していることがわかります。イエズスが主体である「よき知らせ」からイエズスを客体とする「よき知らせ」に移行しています。

これが、「ローマの信徒への手紙」の荘重な冒頭で「福音」という語が持っている意味です。「キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使徒となったパウロから、この福音は、神が既に聖書の中で預言者を通して約束されたもので、御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。この方が、わたしたちの主イエス・キリストです（ローマ1章1-4節）」

この四旬節の第二回の黙想では、教会の使命における神の言葉に注目します。これは今年10月の司教会議における提題解説第3章が扱っているテーマです。この章のトピックの概略は以下のとおりです。

教会の使命はキリスト、人となられた御言葉を宣べ伝えることである

神の言葉は、あらゆる時代に、すべての人の手に届くものでなければならない

神の言葉：キリスト信者の交わりの恵み

神の言葉：宗教間対話の光

(a) ユダヤの民と

(b) 他の諸宗教と

## 神の言葉：現代の文化のパン種

### 神の言葉と人間の歴史

私は、ある非常に限られた論点に限定してお話ししますが、この論点は表現形式の如何に関わらず教会が宣べ伝えるすべての言葉の質と有効性に影響するものであると信じます。

#### 2. 「無益な」言葉と「力ある」言葉

マタイの福音書の、心底を見透かしめる言葉についての説教のくだりに、いつの時代にも読者を震え上がらせてきたイエズスの言葉があります。「言うておくが、人は自分の話したつまらない言葉についてもすべて、裁きの日には責任を問われる（マタイ 12 章 36 節）」。イエズスが「つまらない言葉」で何を意図していたのかを解明するのはむずかしいのですが、マタイの福音書の別の箇所（7 章 15-20 節）に幾らかの手がかりがあります。木の良し悪しはその実によって分かるというテーマで、全体としては偽預言者について語っていると思われる以下のくだりです。「偽預言者を警戒しなさい。彼らは羊の皮を身にまとしてあなたがたのところに来るが、その内側は貪欲な狼である。あなたがたは、その実で彼らを見分ける」。

イエズスの言葉が偽預言者についての言葉と何らかの関係があるとすれば、おそらく「つまらない」という語の意味も解明できるでしょう。「つまらない」と訳されているギリシア語の単語は「アルゴン argon」で、「効果がない」（否定の接頭辞に「はたらき」を意味する「エルゴス ergos」がついたもの）を意味します。イタリア司教会議の訳など、現代の翻訳のいくつかでは「根拠のない」という訳語で消極的意味に解しています。根拠のない言葉とは、言い換えれば中傷のことです。これは、イエズスの脅しへの心配が和らぐような意味に解そうとする試みですが、実際、イエズスが神の前で申し開きをしなければならぬとおっしゃっているのが中傷についてであれば、特別に動揺させられることはありません。

ところが、本当は「アルゴン argon」の意味は積極的で、何も確立せず、何も生み出さない、つまり、空虚で、不毛で、効力のないことを表している語です。そういう意味では、昔のウルガタ聖書の訳のほうが正確でした。“verbum otiosum,” 即ち“otiose”な言葉、つまり「無益な言葉」。これは現在大多数の翻訳で採用されている解釈です。

この「アルゴン argon」という形容詞を、聖書で神の言葉の特徴付けるものとして常に使われている語と対照してみれば、イエズスの言う意味を理解するのはむずかしくありません。それは“energes”という形容詞で、効果がある、効き目がある、必ず力(“ergos”)をともなう、という意味の言葉です。この語は“energetic”（訳注：精力的な、エネルギー的な、活発な、力強い）の語源でもあります。たとえば聖パウロは「テサロニケの信徒への第一の手紙」で、使徒パウロの説教を聞いたとき、テサロニケの信徒たちがそれを人の言

葉としてではなく、それが真にあるところのもの、すなわち、「信じているあなたがたの中に現に働いている（"energeitai"）神の言葉（1 テサロニケ 2 章 13 節）」として受け入れたと書いております。ここでは、神の言葉と人の言葉の対照は、暗に、「働く」言葉と「働かない」言葉、効力のある言葉と効力のない空虚な言葉の対照として提示されています。

神の言葉の有効性というこの概念は「ヘブライ人への手紙」にも出てきます。「神の言葉は生きており、力を発揮（"energes"）（ヘブライ 4 章 12 節）」する、と。しかしこれは古くからある概念です。イザヤ書で、神は、ご自分の口から出る言葉が「むなしく」御許に戻ることはなく「与えられた使命を必ず果た」さずにはいないと宣言しておられます（イザヤ 55 章 11 節）。従って、人が裁きの日に申し開きをしなければならない無益な言葉とは、つまらない言葉全般を指しているのではなく、神の「力ある」言葉を語るべき者が発した、無益で空虚な言葉を意味しているのです。つまり、神の言葉を受けていないのにもかかわらず、人の言葉にすぎない自分の話を神の言葉だと人々に思い込ませようとする、偽預言者の言葉です。ここでは、聖パウロが述べたのとまさに正反対のことが起こります。人の言葉を聞いて、人の言葉としてではなく、違うものとして、つまり、神の言葉として受け入れるのです。神に関するあらゆる無益な言葉に対して、人は申し開きをしなければなりません！ これこそイエズスの重大な警告の意味なのです。

無益な言葉は神の言葉のまがいもの、神の言葉の寄生物です。それは、結ばない実によって見分けられます。定義上、それは不毛であり、効力がないからです。もちろんそれがよいものを生み出す面から見ての話です。神はご自分の「言葉を...見張って（エレミア 1 章 12 節）」おられ、細心に気を配られ、そこに宿る神の力を人が食いものにすることをお許しになりません。

預言者エレミアは、イエズスの言葉に隠されているものを、拡声器を通したように聞かせてくれます。エレミアによって、イエズスが語っているのが偽預言者のことだとわかります。「万軍の主はこう言われる。お前たちに預言する預言者たちの言葉を聞いてはならない。彼らはお前たちに空しい望みを抱かせ、主の口の言葉ではなく、自分の心の幻を語る。夢を見た預言者は夢を解き明かすがよい。しかし、わたしの言葉を受けた者は、忠実にわたしの言葉を語るがよい。もみ殻と穀物が比べものになろうかと主は言われる。このように、わたしの言葉は火に似ていないか。岩を打ち砕く槌のようではないか、と主は言われる（エレミア 23 章 16 節、28 31 節）」。

### 3. 偽預言者とは誰か？

しかし、ここは聖書における偽預言者について長々と論じる場ではありません。聖書はいつものように私達について語っているのです。イエズスの言葉は、世間ではなく教会を裁いています。無益な言葉について裁かれるのは世間ではありません。世間の言葉はすべて、今述べた意味で無益な言葉ですから。しかし、世間がもし裁かれるとすれば、イエズスを

信じなかったことに対してです（ヨハネ 16 章 9 節）。すべての無益な言葉について申し開きせねばならないのは教会の者たちです。私達は神の言葉を宣べ伝える者です。偽預言者とは、折々異端を広める者のことだけでなく、神の言葉を偽る者のことでもあります。当時の言葉からこの語を選んで使ったのはパウロでした。それは文字通り、不正な招き主が葡萄酒を水で薄めるように、言葉を薄めること（2 コリント 2 章 17 節、4 章 2 節）です。偽預言者は神の言葉をそのまま示すのではなく、自分の心から出る山ほどの人の言葉で水増しし弱める者です。

私も偽預言者です。私が神の言葉の「弱さ」、「愚かさ」、「貧しさ」、「飾りのなさ」に自らをゆだねずに自分の言葉で覆い隠し、神の言葉そのものよりも自分が付け加えた言葉を重んじたり、神の言葉の前にとどまって祈り、それを尊び、私のうちに神の言葉を住まわせるためよりも多くの時間を、神の言葉を覆い隠すことに費やすときには、いつでもそうでもあります。

イエズスはガリラヤのカナで、水を葡萄酒に変えられた、すなわち死んだ文字を命を与える霊に変えられた。これが、教父たちによる、このエピソードの解釈です。偽預言者は正反対のことをします。神の言葉という純粋な葡萄酒を、誰も酔わせることのない水、死んだ文字、空しい御託に変えます。偽預言者は、心の奥底では福音を恥としており（ローマ 1 章 16 節）イエズスの言葉を恥としています。これらが世にとって「厳しすぎ」たり、学のある人にとって貧しく素朴すぎるからです。そのため、偽預言者はエレミアが「自分の心の幻」と呼ぶもので味付けしようとするのです。

聖パウロは弟子テモテへの手紙に書きました。「あなたは、適格者と認められて神の前に立つ者、...真理の言葉を正しく伝える者となるように努めなさい。俗悪な無駄話を避けなさい。そのような話をする者はますます不信心になっていき[ます]（2 テモテ 2 章 15 - 16 節）」。俗悪な無駄話とは、神のご計画と関わりなく、教会の使命と無関係な話です。人間の言葉、無益な言葉や講話や文書が多すぎます。マス・コミュニケーションの時代にあっては、教会も、ただ何か言わなければならないから話し、雑誌や新聞から頼まれるから何かを書くことによって、「もみ殻」のような無益な言葉に陥る危険に直面しています。

このようにして、私達は不信心と罪に甘んじ続ける最適の口実を世に与えています。信じない人々が神の生のままの言葉を聞いたときは、私達の説教を聞いたときにありがちなように、「ただの言葉、言葉、言葉だ！」と言って立ち去るのは簡単ではないでしょう。聖パウロは神の言葉を「私たちの戦いの武器」と呼び、これだけが「理屈を打ち破り、神の知識に逆らうあらゆる高慢を打ち倒し、あらゆる思惑をとりこにしてキリストに従わせ」と述べています（2 コリント 10 章 3-5 節）。

人間は騒音で病んでいるとキルケゴールは言いました。「断食が必要だ。ただし、言葉の断食が。かつてモーゼが叫んだように、誰かが叫ばなければならない。『イスラエルよ、静かにして聞きなさい（申命記 27 章 9 節）』と」。教皇様は、ローマの司牧者との四旬節の集会

で、この言葉の断食の必要性を私達に思い起こさせてくださいました。そして私は、教皇様のいつもの例のとおり、この断食への招きは、世ではなく第一に教会に向けられたものだと思います。

#### 4. イエズスは軽薄な話をしに来られたのではない

以下のペギーの言葉にはいつも心を打たれます。

「我が子、イエズスは」

これは、教会が教会の子らに語っている言葉です。

「軽薄な話をしに来られたのではありません。

地上に降りて来られたのは

なぞなぞや冗談を語るためではありません

楽しんでいる時間はありません。

命をお捨てになったのは

作り話をなさるためではありません」

神の言葉を他のすべての言葉と区別するよう気遣う余り、イエズスは使徒たちを宣教に送り出すに際して、途中で誰にもあいさつしないように命じられました(ルカ 10 章 4 節)。私自身、痛く経験したことですが、この戒めは文字通りに守らなければならないことがあります。説教を始めようとしているとき、立ち止まってあいさつしたり、儀礼的な言葉を交わしたりすると、説教すべき言葉への集中がどうしても乱れて、その言葉が持っている、すべての人間的言葉との違いが失われてしまいます。このような差し迫った状態は、ミサを立てるために祭服を身につけるときにも経験することですし、また経験するべきなのです。

説教の内容そのものの問題である場合には、もっと大変です。マルコの福音書で、イエズスはイザヤ書を引用しています。「彼らがわたしを畏れ敬うとしても それは人間の戒めを覚え込んだからだ」(イザヤ 29 章 13 節)。そして、ファリサイ派や律法学者に向かって言います。「あなたたちは神の掟を捨てて、人間の言い伝えを固く守っている...こうして、あなたたちは、受け継いだ言い伝えで神の言葉を無にしている」(マルコ 7 章 7-13 節)。

単純で飾りのない神の言葉を、おびただしい対比や限定や追加や説明というフィルターを通さずに示すことが全くできなければ、内容そのものがたとえ正しくても、神の言葉を弱めることになり、まさにイエズスがファリサイ派を戒めて言ったのと同じことをしていることとなります。つまり、「神の言葉を無にし」、神の言葉を弱め、人の心を貫く力の大半を削いでいるのです。

神の言葉を他の目的のために使ったり、既存の人間の話に神の権威をまとわせるために使

ってはなりません。今より少し前の時代の人、その傾向がどこに通じるかを見て知っています。福音は階級闘争から神の死に至るまで、あらゆる種類の人間の計画を支持するために使われてきました。

説教を聞く人が心理的、党派的、政治的、あるいは衝動的な特定の状態に凝り固まっているために、その人が期待していることを言わずにいたり、その人がすべてについて正しいわけではないと指摘するのがそもそも不可能な場合や、「回心して信じなさい」と言えるところまでその人を導くことができない場合には、神の言葉が党派的目的に使われ、それ故に裏切られることのないよう、神の言葉を声高に唱えないほうがよいのです。つまり、本当の説教はあきらめ、それでもなお福音を伝えようとするのなら、ただ耳を傾け、理解に努め、人々の悩みや苦しみを分かち持つにとどめ、共にいることと愛によって神の国を伝えるほうがよいのです。福音書の中で、イエズスは、ご自分が党派の政治的目的に利用されないよう、よく気をつけておられます。

経験の現実が、従って人間の言葉が、教会の説教から排除されるものではないのは言うまでもありませんが、神の言葉とそれに対する奉仕に従属するべきものです。聖体拝領ではキリストの体がそれにあずかる人を同化させるのであってその逆ではないのと同様に、説教においては、神の言葉はより重要かつ強力な原理であり、人間の言葉を従わせて同化させるものであるべきで、その逆であってはならないのです。それゆえ、教会の教義や規律に関する問題を扱うときは、より頻繁に神の言葉特に新約聖書の神の言葉から始め、それに縛られ続け、そのことによってあらゆる問いへの神の意志が必ずわかると確信する勇気を持つことが必要です。修道会でも同じことが必要です。若者や修練者の教育や霊操やその他のあらゆる共同体での生活において、神の言葉よりも、その会の創立者の著作に内容が非常に貧しいことが多い　より多くの時間が使われる危険があります。

## 5. 神の言葉を語るにふさわしく語る

私の話に強い反論があるだろうということはわかっています。それなら教会の説教というのは、エホバの証人や他の原理主義団体を思わせるような、何章何節と示しながらの聖書引用の羅列や連発でなければならないのか？　もちろん違います。私達は違う伝統を受け継いでいます。私がどういう意味で神の言葉に縛られると言っているのか説明しましょう。

もう一度「コリントの信徒への第二の手紙」を紐解いて見ましょう。聖パウロはこう書いています。「わたしたちは、多くの人々のように神の言葉を売り物にせず[文字通りには「水増しする」「不正に手を加える」]、誠実に、また神に属する者として、神の御前でキリストに結ばれて語っています(2コリント2章17節)」。それから、聖ペテロは第一の手紙で信徒たちに説いています。「語る者は、神の言葉を語るにふさわしく語りなさい」(1ペテロ4章11節)。「キリストに結ばれて語る」、「神の言葉を語るにふさわしく語る」とはどういう意味でしょうか？　聖書の中でキリストと神が語っている言葉だけをそのまま繰り返す、

という意味でないのは確かです。これは、基本的な靈感、他の全てのものを「形作り」、支配する考えは、人からではなく神から来るのでなければならない、という意味です。説教者は、「神によって動かされ」、神の御前にいるように語らなければなりません。

説教や文書や口頭での信仰宣言を準備する方法が二つあります。机に向かって、自分の知識や好みに基づき、宣べ伝える言葉や追うべきテーマを自分で選び、そして、説教が仕上がったら、ひざまづいて、自分の書いたものを祝福し、自分の言葉に力を持たせてくださるよう、取り急ぎ神に願う。これはこれで一応よいものではあります。預言者的な方法ではありません。すべきなのは、この反対です。まずひざまづいて、神が語ることを望んでおられる言葉は何かお尋ねする。それから机に向かい、自分の知識を使って、その言葉を書き下ろす。これですべてが変わります。神が私の言葉をご自分の言葉とするのではなく、私が神の言葉を自分の言葉にするのだからです。

どのような状況でも、復活した主はご自分の民に届けたいと望まれる言葉を心に抱いておられる、という確信から始める必要があります。物事を変えるのはこれです。見出さなければならないのはこれです。そして主はそれを僕に必ず明かしてください。僕が謙遜に執拗に問い続けるならば。最初に、ほとんど感知できないほどの心の動きが起きます。心の中で光がまたたき始め、聖書の中のひとつの言葉が注意を引き、ひとつの状況を照らし始めます。

まことに「どんな種よりも小さい種」ですが、その中にすべてがあったことが後からわかります。たったひとつの音がレバノン杉を倒したように。それから机に向かって本を開き、自分のメモを調べ、教父や聖人や詩人に伺いを立ててください。しかし、これはすでに別物なのです。もはや神の言葉があなたの文化に仕えているのではなく、あなたの文化が神の言葉に仕えているのです。

オリゲネスはこの発見に通じる過程をよく説明しています。オリゲネスによれば、聖書のうちに糧を見出す前に、感覚のある種の貧しさに耐える必要があります。魂の四囲を闇に囲まれ、人は出口のない道に入ります。苦勞して探しつつ祈り続けていると、突然御言葉の音が鳴り響き、即座に何かを照らし出されます。魂が求めていたお方が、「山を越え、丘を跳んで（雅歌 2 章 8 節）」会いにやってこられます。私達の心に神の力強い光り輝く言葉を受け入れさせてくださいます。

この瞬間の喜びはすばらしく、エレミアにこう語らせたほどでした。「あなたの御言葉が見いだされたとき わたしはそれをむさぼり食べました。あなたの御言葉はわたしのものとなり、わたしの心は喜び踊りました（エレミア 15 章 16 節）」。

何時もながら神の答えは、扱うべき状況と問題に、あたかもまさにそのために書かれたように、その時点でおどろくほどぴったり当てはまる聖句という形でやってきます。聖句を引用したり解説したりする必要さえないこともあります。その言葉が説教者の心の中にあり、語ることをすべてを形作れば十分です。このような場合、説教者は事実上「神の言葉を

語るにふさわしく」語っています。この方法は常に有効です。教会の重要な文書作成にも、師が修練者に教えるときも、つつましい主日のミサで練り上げた説教をするときも。

深く信じ骨肉と化している神の言葉のひとつが、まだ語らないうちから時には知らぬ間に、いかに多くを人に与え得るものかを、私達はみな経験してきました。何人もの聞き手を告解に導いたのは、数ある言葉のうちで心に触れたこのひとつだと見分けられることも少なくありません。

神によって動かされ、神のまなざしの下で、誠実にキリストについて語る、というキリスト教を宣べ伝える条件を示したあと、使徒パウロは問います。「このような務めにだれがふさわしいでしょうか（2 コリント 2 章 16 節）。だれもふさわしくないのは明らかです。私達は、この宝を土の器に納めているのですから（2 コリント 4 章 7 節）。しかし、私達はこのように祈ることができます 主よ、あなたの言葉という宝を納めなければならない、この貧しい土の器をあわれんでください。私があなたについて語るとき、無益なことばを口にしないようにしてください。あなたの言葉を他のすべての言葉から見分け、他の言葉がみな私たちにとって味気ないものとなるように、どうかひとたび、あなたの言葉を味わわせてください。お約束のとおり、大地に飢えを送ってください。「パンに飢えることでもなく 水に渴くことでもなく 主の言葉を聞くことへの飢えを（アモス 8 章 11 節）」。

ラニエロ・カンタラメッサ神父のプロファイル

<http://www.cantalamessa.org/en/index.php>

Raniero Cantalamessa is a Franciscan Capuchin Catholic Priest.  
Born in Ascoli Piceno, Italy, 22 July 1934, ordained priest in 1958.  
Divinity Doctor and Doctor in classical literature. Former Ordinary  
Professor of History of Ancient Christianity and Director of the  
Department of religious sciences at the Catholic University of Milan.  
Member of the International Theological Commission (1975-1981).